令和７年（２０２５年）９月１６日（火）

豊中市第二庁舎３階大会議室

午前９時３０分～１０時３０分

令和７年度（２０２５年度）第１回 豊中市総合教育会議

次　第

1　開会

○市長あいさつ

2　案　件

(1)　グローバル人材の育成に向けた外国語（英語）教育について

3　配付資料

○令和７年度（２０２５年度）総合教育会議名簿　　資料１

○グローバル人材の育成に向けた外国語（英語）教育について　　資料２

令和７年度(２０２５年度)第１回豊中市総合教育会議　議事録

１．日時

令和７年(２０２５年)９月１６日(火)　午前９時３０分～１０時３０分

２．場所

豊中市役所第二庁舎　３階大会議室

３．出席者

市　　長	長内　繁樹
教　育　長	岩元　義継
教育委員会委員（教育長職務代理者）	山野佳世子
教育委員会委員	赤尾　勝己
教育委員会委員	松本　裕美
教育委員会委員	堀田　博史
教育委員会委員	黒田久美子

４．案件

（１）　グローバル人材の育成に向けた外国語（英語）教育について

５．出席職員

都市経営部

次長	玉富　香代
経営戦略課長	松本　光真
経営戦略課長補佐	西浦　理紀
経営戦略課	大重　友香
経営戦略課主幹(教育委員会事務局 教育総務課)	田上　淳也
経営戦略課副主幹(教育委員会事務局 教育総務課)	西岡　良和
経営戦略課主査(教育委員会事務局 教育総務課)	武市　香織
経営戦略課主査(教育委員会事務局 教育総務課)	外園　博人

教育委員会事務局

事務局長	森山　幸雄
教育政策監	中尾　栄一
理事	堤　昌子
次長兼社会教育課長	北村　宣雄
次長兼学校給食課長	勝井　隆文
学務保健課長	中積　崇
学校施設管理課長	桑田　篤志
読書振興課長	西口　光夫
教職員課長	倉田　仁一
教職員課主幹	大堂　晃嗣
教育センター所長	松田　貴正
学校教育課長	小渡　豊
学校教育課主幹	河村　祐希
児童生徒課長	込山　隆之
学び育ち支援課長	小林　利男
学び育ち支援課主幹	津田　晋
中央公民館長	本田　光直

６．議事

長内市長
・本日の案件「グローバル人材の育成に向けた外国語（英語）教育について」、事務局より説明をお願いする。

小渡課長
・「豊中の外国語教育」について説明する。
・2 ページめ、本市の英語教育の転機は平成 29 年度の文部科学省の学習指導要領の改定である。
本改定では、小学校 3、4 年生の外国語体験活動が盛り込まれ、5、6 年の外国語活動が領域から教科に変更されたグローバル化する社会での英語力の向上を育成する観点から、AET の派遣を増やし、外国語担当者会や小学校高学年教科担任制を推進してきた。
特に AET が小学校に入ることで、英語で授業を進めることを教師自ら体験し、ゲームなどを通じて、子どもたちがネイティブの英語を聞き、英語でのやりとりや英語で発表することが大きく増えてきた。こういった改革が、AET が拡充したことで進んでいるというふうに実感をしている。
・3 ページめ、本市の英語教育の状況について説明する。
左のグラフが平成 31 年度の全国学力学習状況調査の結果、右グラフが令和 5 年度の調査結果である。英語の領域ごとにグラフになっており、調査は毎年行われるのではなく、過去 2 回分の分析資料を掲載している。
これまでの本市の英語教育の成果としては、平成 31 年度の英語調査では、3 領域において全国平均を上回り、令和 5 年度調査では、5 領域で全国平均を上回った。特に書くこと、話すこと、発表することにおいては大きく上回った。
・4 ページめ、学力学習状況調査における本市の生徒質問紙調査結果の経年変化について説明する。
「英語の勉強は大切だと思う」という調査ので、肯定的回答の割合が伸び、「即興で伝える活動」「スピーチやプレゼン」「問答や意見を述べあう活動」においても教育課程の中で、AET を活用しながら、活発に行われている結果というふうに考える。
・5 ページめ、調査結果から、英語においては、5 領域すべてにおいて、令和 5 年度の全国平均を上回る結果となった。
個別に考察すると、全国平均と比較して、「極めて強い領域」と「強い領域」というものが見えてきた。「極めて強い領域」としては、「書くこと」、「話すこと（発表する）」が、全国平均を 1 としたときに、1.5 前後の大きな開きがある。
それに対して「強い領域」は、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと（やりとり）」は、「書くこと」、「話すこと（発表する）」と比べると全国平均との開きは少ないものの、全国平均よりも優位な領域となっている。
一方、文部科学省は全国的な課題として「話すこと」、「書くこと」に課題があるとし、我が国の英語教育の課題として次の 5 点を挙げている。
① コミュニケーション総量の少なさ
② 学ぶ動機づけの弱さ
③ 家庭学習の時間確保
④ 即時フィードバック
⑤ 既習事項の定着
これらの課題に対応する事業を国が展開すると考えられ、次年度の国の事業については、後の資料で説明する。
・6 ページめ、豊中の強みを踏まえた取り組みとして、今年度から 3 年間、AET 派遣事業を企画した事業者による特色ある取り組みを 1 つ紹介する。
これは対面とオンラインを融合ブレンドとした事業になる。

通常の対面事業では、教員と AET の 2 名のティームティーチングによることとなるが、このオンラインブレンディット授業の方法は、10 名以上の AET と同時にオンライン上で繋がるということができ、子ども一人ひとりにマンツーマンでのコミュニケーションを含むアクティビティの時間を通常より多く取り入れることが可能となった。
今年度、小学校１9 校、中学校 6 校、義務教育学校 1 校で活用することになっている。

・7 ページめ、公表された令和 8 年度文部科学省概算要求公表資料における英語教育分野の教育事例を参考として説明する。
英語教育全体で 2 億円から 7 億円の増要求となっており、中心となるのが AI を活用したグローバル人材育成のための英語教育強化事業である。
当初の予算規模は 3,000 万円から 4 億 7,000 万円と 10 倍以上の増要求となっている。
また、英語教育の長期アウトカムとして、中学 3 年生の CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）英検 3 級程度以上を令和 9 年度までに 60%としていくことも注めされている。
・8 ページめ、議論の参考資料となる。
・9 ページめ、大阪府の英語教育推進事業にかかる英語学習ツール「BASEinOSAKA」について説明する。「BASEinOSAKA」を活用して、単語、表現などの練習を行っている学校は豊中市内小学校 10 校、中学校 4 校ある。
「BASEinOSAKA」についての 3 つのポイントを説明する。
1 つめ、音読した音声を発音して、評価採点できる。
2 つめ、英検二次対策ができる。
3 つめ、管理画面で、児童の学習状況一元管理できる。
また、校内だけでなく家庭学習にも活用できるようになっている。
・10 ページめ、他市事例として先日、視察に行った京都市立岡崎中学校、グローバルコンテンツプログラム GCP について説明する。
このグループプログラムは、他者の視点や世界感を理解し、異文化の中で、人々とオープンにコミュニケーションを図る力の育成をめざすもので、オールイングリッシュの受領が特徴とされている。
今後、豊中市として、英語教育に力を入れることについて、具体的に現在の英語学力の優位性を高める取り組みについて、どのようなことができるか、その他、各委員様のお考えをもとに、自由闊達なご議論をお願いする。

長内市長
・グローバル教育、英語教育に関しての説明で令和 8 年度の文科省概算要求の額を見て驚いている。予算額を見てもわかるように義務教育までを持っている市町村が、頑張る必要があるが、頑張れる市町村もあれば、頑張られない市町村もあり、財政状況も厳しいというところからかなり格差が続いていくような状況であると思う。
・今後人材力は国力ということを考えると、当たり前に英語によるコミュニケーション取ることができるように、していかなければならないと痛感している。
・長期間、英語の勉強はしていても話すことはできないという矛盾を感じるような状況であるため、早く議論したいと思っている。
・学力としてはできているということではあったが、学力とコミュニケーションとしてのツールはまた別であり、英語そのものについてと今後のグローバル教育としての英語に関してどのように感じているのか、聞きたい。

山野委員
・グローバル人材育成に向けた言語教育の問題で、議論する。
・資料によると現場にいた 5 年前とは、英語の教科活動や教科書の内容が、随分が変わってきている。AET の派遣事業についても、対面、オンラインといった様々な手法で、子どもたちに英語に触れるように変わってきており、充実してきたと感じている。
・4 点、思いがある。

1つめ、大前提に英語はとにかく1つのツールであるということ。
2つめ、学テでは市は好成績な結果がでているが、学力の高い層がある一方で、二極化しているところも1つ課題に感じている。中間層や下位層のことを考えると、習ったことも復習しないと定着に繋がらないため、家庭学習の定着が1つ大きな課題であることは現場にいるときから思っていた。
3つめ、英語教育では、英語のツール使っての非認知能力の育成が1つポイントになる。
コミュニケーション力や自分の思いを言語化すること、プレゼンテーション能力を育成することによって自分自身の自尊心の向上や夢を持つことにも繋がると思う。
4つめ、国際理解的グローバルな視点では、渡日の子どもたちが豊中市にもたくさん来ている。ニュースでは日本の子どもたちの留学率が低いと言っている。今後はグローバルな視点を持つ子どもたちを育てていくという意味では、1つのツールとして英語教育の充実を図っていくことが選択肢の1つと思う。

・現場の先生たちはさまざまな教育が増え、必死でやっているし、英語においても年間何回も研修しているのも見にいったこともある。
家庭学習に繋がるようなことで具体策として今各学校の裁量でしていることを市費で全学校にできるような状況を整えることや、オンライン授業でAETの人と触れる機会を作ることの2点がいいと思う。

松本委員

・若い頃から「英語は話せないと」と周りから言われ続けたが、結局英語を話すことはできない。留学した友達が言うのは、日本人は書ける文法はしっかりしているため書けるが、話すことディスカッションができない。
・他の国から来た人たちは、書かせたら「何これ」という文章を書いていても、ディスカッションのときは、ものすごく活発に英語で話すことができる。
それは日々の訓練によるものであり、日本の今までの英語教育では受験英語の読み書きヒアリングが中心であったためコミュニケーションはしてこなかった。
・会社では海外との取引が増えてきており、話すことができないと壁になってしまう。学校教育だけでは、英語に限らず限度があり、社会に出てからも積み重ねることが必要である。積み重ねを続けていくためのしっかりした状態をつくれるような形で、教育を考えていかないといけないと思っている。そこには、今始まっているネットやAIを使って、英語と触れ合う機会をたくさんもつことは欠かせない。留学するにはすごい時間も費用もかかり、留学できるのは限られた子どもたちになるが、日本にいてネイティブの人とコミュニケーションができるように進んでいけたらと思う。

黒田委員

・日本は試験のための英語学習だと、体験からも思っている。
たくさんの時間を費やしているので、生かせるものになったらと思う。
中1の娘によると初めてのテストで英語を習っている子と習っていない子の差が出た。英語を習っている子に関しては、苦手意識がないため「簡単だよ」と言う。一方で英語を習っていない子は小学校の英語で試験ということはしてきてないので、「もうさんざんだった」と言っていた。この格差って何とか埋められないのかと思う。
子どもに英語の授業での楽しいってこと聞いたが、「楽しくない」との回答だった。
「楽しかったことはある」と聞くと、「オンラインで海外の人と話したことは楽しかったのでもっとしたい」と言っていた。
・今は、翻訳機能の性能がよくなってきている。日本は文法をしっかり習って、全体に生かされることも多く世界的に評価されていると聞いたことがあるが、その点は翻訳機能が結構フォローしてくれるところがあり、やはりコミュニケーションが大事だと感じている。

・私の周りで言うと、高校入試のときに英検がプラス点になるため、小中学生もすごく英検を受けている。また試験のための英語にならないか不安になる。中学校の大事な試合でも、英検が重なるため試合にいかないとかもあり、もやっとすることが多いと思っている。
家庭学習の必要性はわかるが、今の子どもは忙しく、家庭学習が学校で終わることができるというのが保護者の思いではある。

堀田委員
・市長から学力と話せることは別ではないかっていう話があったことを受け、話したいと思う。
・私は奈良の特進校に通っているときがあり、生徒たちは教室では英語を流暢に話し、ペーパーテストの点数は良く、学力が高かった。ある日午前中に、担任の先生が奈良公園に行き、アメリカの文化と日本の文化の違いを、聞き取るという課題を出した。
英語を話せる生徒たちは余裕で奈良公園に向かったが、全く英語が通じなかった。学校に戻ってきた生徒たちは「授業でやっていてもダメなんじゃないか」と言い出した。先生は結果をわかっていて、作戦会議を提案した。生徒たちは、ボードを持っていく・身振りをいれる・もう少しゆっくり話すプランを持って行くと午後からはある程度伝わってきた。生徒たちは学校の授業で習ったことは試さないといけない。テストで点数をとっていても、外で通用するかどうかは試してみないとわからない。福井県では年 3 回から 4 回のパフォーマンス課題とかパフォーマンステストってことをやっている。
・結局学力が高くても通用するかを子どもたちが自覚できないと意味がないと思う。テストの種類を変えていくことも１つだと思う。
・豊中市の学力調査が高いことはいいと思う。箕面市は、友好都市がニュージーランドかオーストラリアで、そこと学校が 24 時間テレビ会議で繋がっている。廊下にテレビモニターがあり、24 時間繋がいるため、子どもたちが通ると向こうから話し掛けてくることがある。当初はそこを通るのがいやでモニターの下を通ったり遠回りしたりとかしていたが、徐々に話してみようとなってきた。話すようになると自分が授業の中で受けた実力がある程度露見するので、足りない箇所が分かり、通じてよかったなとか実感が出てきた。
・豊中市は生徒の学力がある程度高くなってきているので、あとは環境を整えて子どもたちの実感が伴っていけば、テストを受けようとか、英語の通訳になろうとか先が開けてくると思う。

赤尾委員
・4 点話しをする。
・１点め、AET（外国人英語指導助手）の授業のクオリティを考える必要がある。豊中市で 1 億 3,860 万円、委託料払っている。これだけのお金を支払い、本気で豊中市の子どもたちの英語能力を高めたいと思うのであればクオリティの高い AET に来てもらう工夫が必要だと思う。委託している会社に全部丸投げしているのでは AET の質がわからない。
・2 点め、令和 8 年度文部科学省の開催予定の AI を活用したグローバル人材育成。AI はあくまでも、児童や生徒の個別最適な学習であり文法や発音がすぐにチェックできフィードバックするには最適である。同時に子ども同士や外国の人たちとのコミュニケーションにより英語教育の充実を図ることができる。AI プラス共同学習が両輪となり、やっていく必要がある。
・3 点め、資料にある岡崎中学校のグローバルコンテンツプログラムが一番いいと思う。
生きた英語を使うには外国の方たちの文化の中で自分の意思をどう伝えていくのかが重要なことになる。グループの仲間との話し合いの共同学習を意識しながら、グローバルの中で、日本の文化のよさを発信しながらも、相手の文化を取り入れるというグローバルな時代だと思う。
・４点め、枚方市立長尾中学校は関西外大と連携して、授業や研究事業を行っている。
豊中市は大阪大学と連携し、先生の指導力を高めていく工夫をしてみたらどうか。
関西外大は外国学部があり、第 2 言語の習得の理論について詳しい先生がいる。大学との連携の中で、パワーアップすることも 1 つ考えてもいいのではないか。

岩元教育長
・グローバル社会はこれから先、後戻りしないと思っている。
・外国の方もたくさん豊中市に住んでおり、ビジネスの世界でもインターネット社会を背景として、グローバル化はこれまで以上に進んでいると思う。そういう意味でもテストの点数がとれることで英語でコミュニケーションできるかというのは、完璧とは言えないし、さらに充実させていく必要があると思う。
・外国語活動学習指導要領で、小学校3年生以上に位置付けられたが、言葉の習得にはもうちょっと小さな頃からやってもいいのではないか、より効果が高まるのではないと思っている。例えば豊中市ではほとんどやっていない小学校1年、2年生のところ、政令市である神戸市、横浜市、さいたま市、北九州市などは1年生からやっている。豊中市でもぜひ検討していくべきだというふうに思っており、英語検定もこれから国際社会を見ていく上で、非常に自信になる。資格を持っているということで、取得するときの学びのモチベーションになっていくと思う。これから国際社会を生きていく上でも、力になっていくと思うので、英検取得の費用について助成している市がいくつかあるように豊中市も検討に値するのではないかなというふうなことを思っている。
今非常に全国学テの中でもいい成績は出ているけれどもさらに良い部分を伸ばしていくというふうなところで、豊中の教育の特性を出していければ、さらによくなるのではないかと思っている。

長内市長
・委員の方にグローバル化、英語教育についてお聞きしたが、つくづく思うのは、万博でたくさん海外から外国の方が来られて、千里中央とか萱野のところにたくさん増えている。
日本では英語が通じないから海外から来た人が今、困っている。しかし今後困るのは、我々日本人である。特にグローバル化の観点で言うと様々な国際交渉、停戦の交渉は、アメリカを中心　に英語が主体となっている。
・こんな状況の中で、生まれる子どもの数も大変減っており、マンツーマンに近いような形でしっかりと会話力とグローバル力をつけていき、国際環境もしっかり教える必要があると痛感している。資料の中でも、岡崎中学校グローバルコンテンツプログラムの概要を聞かせてほしい。

河村主幹
・岡崎中学校には9月8日にグローバルコンテンツプログラムの授業を視察に行ってきた。
岡崎中学校では、昨年度試験的に実施し、今年度から中学校1年生で導入している。グローバルコンテンツプログラムは株式会社ISA、もともとAETの派遣業者が、単純な英語教育だけではなく、グローバルに活躍していく人材を育てるための必要な資質能力の育成ということで、提案しているプログラムであり、岡崎中学校以外では私立の中学校、高等学校で取り入れている。
・授業の実際は、業者から派遣された外国人の講師が年間約30時間のプログラムを、カリキュラム基づいて実施し、すべて英語で作られたテキストを使いながら英語で授業が展開されている。視察を行った中学校1年生の授業は、コミュニティとは何かということを考えるというところで、実際の活動の中身は小学校の英語の授業のようなゲームみたいなことも取り入れながら、子どもたちが、コミュニティってなんだろうとお互いにディスカッションしながら考えていくといった授業をしていた。

長内市長
・議論を進める上で、AETの委託の選定方法を確認したい。

小渡課長
・選定にあたってはプロポーザル方式での選定となっており、今回の選定から3年契約としている。

長内市長
・プロポーザルで選ぶときはどのような視点で選定しているか。
・先程、教育委員から話があったように、AETはネイティブに英語を話すが、様々な国、アメリカ大陸だけも東西の海岸によって英語の話す言葉が違うとかも聞くが、どのようになっているか。英語が話せたらいいという基準で選んでいるのか。

小渡課長
・AETの資格要件についてはいくつか教育委員会で指定している。
・6点あり、「英語を母国語としている国の大学以上の卒業資格を有している者」「英語の発音リズムイントネーションが優れている者」「日本における小・中学校・義務学校での英語教育の指導経験が十分にあること」「文部科学省の教科書を使って指導ができること」「業務の実施に支障がなく、業務に適したビザを持っている者」「教職員とのコミュニケーションを円滑に行えるレベルの日本語力を有している者」と基準で、AETの資格要件を定めている。

長内市長
・委託会社もその選定基準で選んでいるか。

小渡課長
・委託会社に示す資格基準となっている。

長内市長
・日本語でいう方言みたいに英語も全然通じ方が違う部分は個性として受けいれられる範囲の中でやっていければいい。今後お金をかけていく上でそういったポイントもあり、これからは英語も若年化していくときである。
・三つ子の魂100までで覚えた音はなかなか忘れないから、英語教育を進めていく必要性も感じている。
・教育委員にはグローバル化の重要性について理解していただいており、今後教育予算として投資していく方向性として学力として見ていくべきなのか、受験英語として時間を割いてお金をかけていくか。豊中市の特徴として他者の世界間を理解した上でコミュニケーション能力が必要なのかが予算編成での大きなポイントになってくると思う。今、英検3級は学力を示す中でのポイントとなるのかコミュニケーションをとるポイントとなるのか。

岩元教育長
・会話のテストもあるため、ペーパーだけではなく、会話についてもテストの中で見ているし、英語学習ツールも、英検二次対策の質問に対して自由回答を評価することがある。そのため会話力も英検の中で見ている

長内市長
・学力については、他自治体と遜色ない結果となっている。
・プラスで新規に追加予算をかけていく場合は、学力以外になるのか。会話力、コミュニケーション力のグローバル人材育成のための仕組みという観点で、もう少し掘り下げて話を進めたい。

岩元教育長
・一番最後の資料の岡崎中学校の英語のスキルはもちろんだが、言葉だけではなく多文化理解や年間 30 コマのプログラミングの中で、例えば他者との協働のあり方やコミュニケーションのあり方等行動するためには何が必要なのかというようなことを一体的にプログラム化したような学習内容になっているため、もともとは AET であるが、授業の中で英語でやりとりするということを超えたところでの学びを提供してくれるようなプログラムだと思っており、研究に値するということで我々も視察にいっている。
・その元になるのは、異文化理解や他者を受け入れるというところが、今の日本の社会の中で非常に難しい、以前よりも厳しい状況になってくると思うので、小学校からしっかりと異文化理解教育ということも並行してやらないと、英語のスキルだけ身につけても外国人を排除しますみたいなになると全く意味がないと思うので共同できる人材を育成していくための教育も大変重要だと思っている。

赤尾委員
・全く同感である。
・受験英語プラスアルファーとしてはコミュニケーション能力と多文化共生といった自分と違った文化に対してもやっぱり寛容であるということ出会って、小さいころからは育んでいくということはとても重要なことで、どうしても日本人というところにこだわってしまう。豊中市の中で異文化、外国の人達と生きていく力をつけていくことはとても重要である。

堀田委員
・私立の幼稚園では幼児教育の中で月に数回、ネイティブの人を呼んで保育をしている。箕面市は、月 2 回ほど公立の幼稚園も取り入れており、小学校 1 年生以降もやっていくみたいなところが、将来性があるのではないかと思う。
・AI を導入する動きが、文科省にあっても、英語に興味があるとか、学力が比較的英語に対して高い子どもたちにとっては、家庭学習での宿題をやることの生活習慣自体がついているので、プラスに転じると思うが、宿題をすることができない子どもたちにとっては、AI ツールを取り入れても、うまく作用するまでに時間かかるのかなと思う。
・ネイティブな言葉に触れ合う時間を、小さなときからつけることが、最大の英語教育を推進する中の 1 つかなと思う。
・英語に興味がある非常に英語学力が高い子どもたちには、教育課程の特例校に豊中市がなることが英語が比較的得意な子どもたちの層をぐっと上げることにもなると思っている。

長内市長
・実体験がやっぱり基本である。

黒田委員
・子どもが通っていたところは週に 1 回、ネイティブの先生が来て、英語をやっていた。そうすると私も話しかけることになり、英語や英語を話す人に対してのアレルギーはないなと思う。
・英語は苦手ではあるが、小さい頃から英語に触れるっていう環境はとてもいいなと思うし、留学をするとそうせざるをえない環境になる。
・最近ではスターバックスの店員さんたちがみんな英語をペラペラ話している。
不思議すぎて、英語を話せることが、スターバックスの採用条件なのかって聞いたら、そんなことはなく、毎日話すことで話せるようになると言っていたので、そういう機会づくりや話す機会がたくさんあればいいなと感じた。

松本委員
・話す環境をいかに作ってあげるかっていうところで、確かに小さい頃から言葉というのは理屈ではなく聞いて、覚えていくものなので、そういう環境を小さい頃から何らかの形で作ってあげたら、アレルギー的な拒否反応というのが少なくなるのかなあというふうには思う。
・子どもが通った保育園は、外国人、外国から来た人達もおり、子どもを預けていたため、あまりよくしゃべれないときから、子ども同士は、何か訳がわからないけどボディランゲッジも含めてコミュニケーションはしていた。そういう機会があれば、壁をなくすとコミュニケーションに入っていけるのかというふうには思うし、日本語だけをしゃべる人たちだけではなくいろんな世界があるんだよ、いろんな言葉の人たちがいて、違う文化を持つ人たちがいて、そういう人たちが地球を作っていてそして協力して、いろんなことやっていくんだよっていうことを無意識のうちに、感じていけるような、何かそんな環境があれば、いいなあと思う。
・岡崎中学の仕組み、やり方も１つですごくいいなと思うし、私立の学校とかであればタイなどの外国人の先生にきてもらい、その時間は日本語を話さない工夫をしているっていうのを聞いたこともあるし、勉強とではなく、コミュニケーションというところから入っていけるようなふうな工夫もあっていいと思う。

山野委員
・いろんな委員の話聞いて、話す環境をつくることが必須だというふうに改めて思った。
・個別最適な学びと強制的な学びと両方あり、AI はみんながうまく使い切れないかもしれないが例えば、学校に行きにくい子どもたちなんかにとっては、自分に合う学びを、自分で選んでいけるための１つでもあり、協働的な学びがあれば、今回の岡崎中学校のような、総合学習の中で、何か理解してその中でツールとして英語使うという形が、一番いいのかなと思った。
・教科の中で、オールイングリッシュというのは、なかなか現場としてはわからない子どもが置いてきぼりになってしまい、補足の説明をしないといけないため、一足飛びには文科省のいうオールイングリッシュは学校の現場は難しい。
・英語を好きな子どもたちはすごくいいが、英語が苦手な生徒にとっては、お客さん状態になってしまうので、なかなかすぐには無理だと思うが総合学習の中など違う場面でいろんな話す機会を英語を通じてやってもらえればいいのかなと思った。
・他の委員の話を聞いていても、こども園や保育所の時代、小学校１年生の時代から、英語に触れる機会をたくさん作ってあげることで、興味を持ち、英語の力だけではない多面的力、認知能力もついていくと改めて思った。
・豊中市が可能であれば、英語の特例校の仕組みや、幼稚園、保育所、こども園の頃からも少し英語に触れる機会を作っていただけたら、少しでも近づいていくのかなっていうふうに思った。

長内市長
・多世代、いろんな場面で、交流ができる形がやっぱり一番いいのかな。
・姉妹都市カリフォルニア州サンマテオ市としての交流が深まってきており、多文化共生という点では、我々と価値を共有している。60 年の交流がある市でもあるので、時差はあるけれど、Ｗｅｂなどで交流していくようなシステムを作っていけたらなと思う。
・以上で、第１回豊中市総合教育会議を閉会する。
・ありがとうございました。